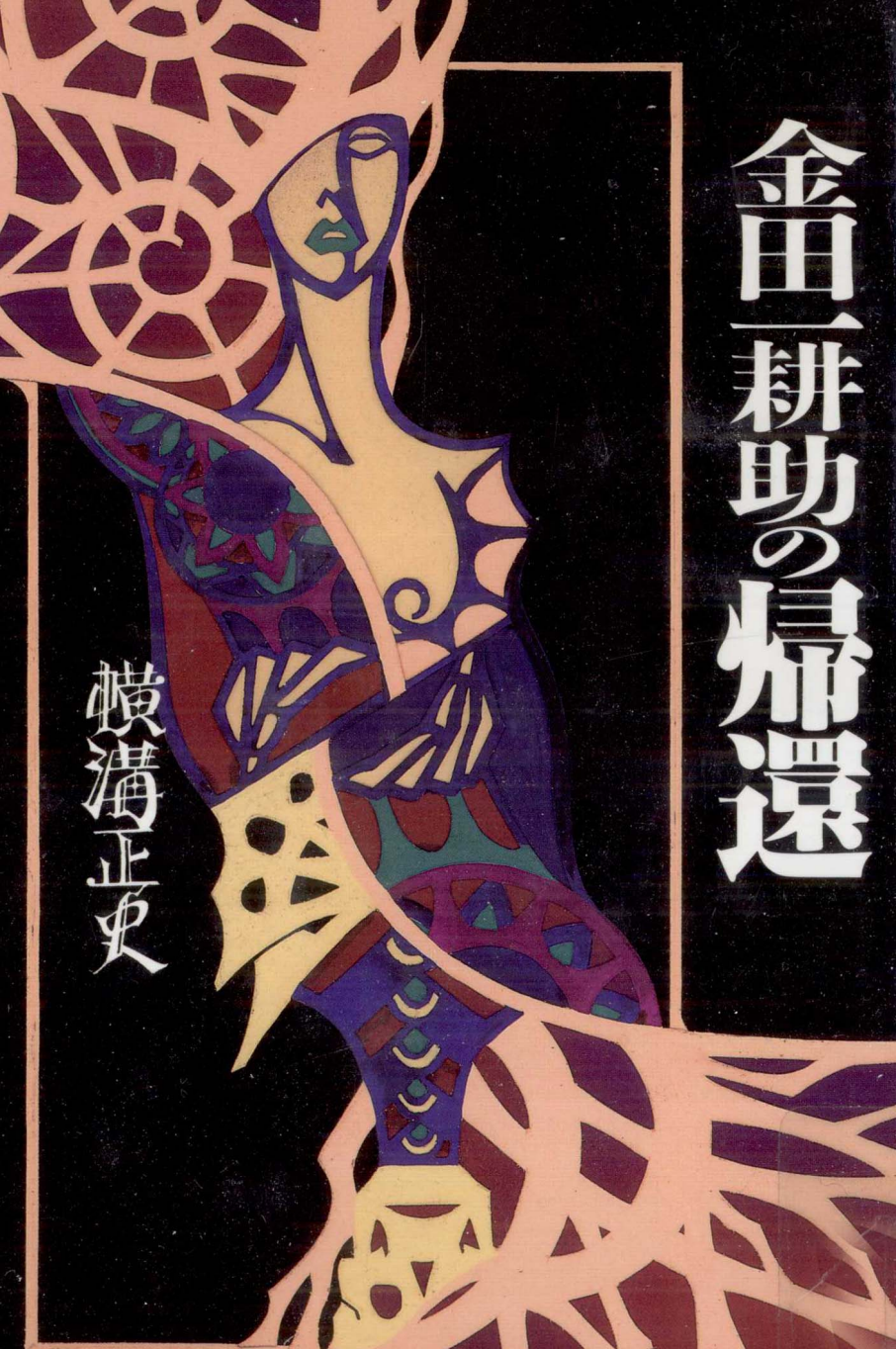


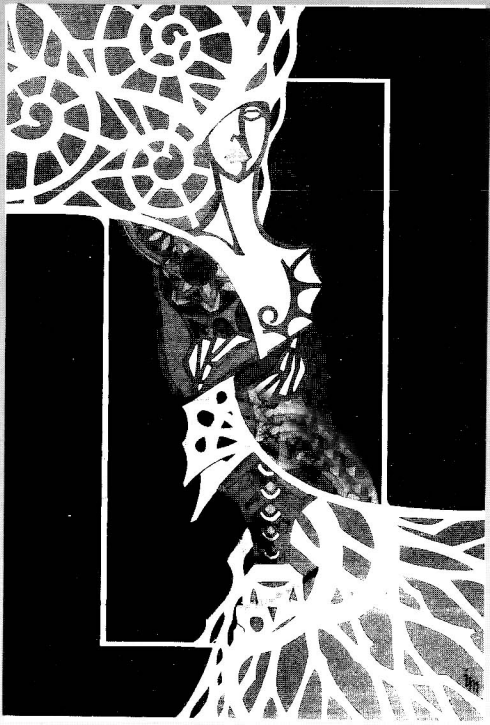
金田耕助の帰還

横溝正史



金田耕助の帰還

横溝正史



出版芸術社

●著者紹介

横溝正史（よこみぞ・せいし）

一九〇二年、神戸に生れる。大正10年4月、19才で処女作「恐ろしき四月馬鹿」を「新青年」に発表。以後、新青年の名編集長として腕をふるい、江戸川乱歩らとともに日本探偵小説黎明期の、中心人物として活躍した。昭和8年、作家專業となった直後、略血して闘病生活を余儀なくされるが、「鬼火」「真珠郎」など鬼気せまる作品を次々と発表、みごとに再起をはたす。戦後いちはやく「本陣殺人事件」の連載を開始し、昭和23年、同作品で第一回日本探偵作家クラブ賞を受賞した。「本陣」で初登場した金田一耕助は、以後、日本の名探偵の代名詞的存在となる。昭和20年代から30年代にかけて、「獄門島」「八つ墓村」「悪魔の手毬歌」等、金田一耕助の活躍する本格推理小説を数多く発表、昭和40年代に入っしてしばらく沈黙するが、40年代後半、旧作の文庫化、映画化などの影響による爆発的な横溝正史ブームに応え、「病院坂の首縊りの家」「悪霊島」等の新作を発表した。昭和56年、79才で他界するが、60年間作家生活の最後まで、新作の構想を練っていた。

同時発売「金田一耕助の新冒険」

金田一耕助の帰還

発行日 平成八年五月二五日 第一刷

著者 横溝正史

発行者 原田 裕

発行所 株式会社 出版芸術社

東京都文京区音羽一〇一〇四 池田ビル
郵便番号 一〇一

電話 〇三―三九四四―六二五〇

FAX 〇三―三九四四―七四六〇

振替 〇〇―一七〇―四―五四六九一七

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

近代美術株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。
©代表・横溝孝子 一九九六 Printed in Japan

目次

毒の矢	3
トランプ台上の首	47
貸しボート十三号	89
支那扇の女	111
壺の中の女	137
渦の中の女	156
扉の中の女	175
迷路荘の怪人	199
●金田一耕助誕生記	239
横溝正史	
●解説 浜田知明	250

装画
——
今井真理

装帧
——
森下年昭

毒の矢

一

拝啓

あなたの奥さんは同性愛のたわむれにふけつて
います。相手はアメリカがえりの的場奈津子夫人
です。そんなことをしていてよいのでしょうか。
ちよつと御注意申し上げます。

三芳新造様

黄金の矢

金田一耕助もいままでずいぶん、いろんな脅迫状や

密告状を見てきたが、黄金の矢という署名入りのこの
手紙ほど、つよく興味をひかれた密告状はなかった。

それはどこにでも売っていきそうな、ありふれた便箋
のうえに、新聞や雑誌から切りぬいたらしい印刷文字
が、大小とりまぜくねくねと、不規則に貼りあわせて
あるのである。

封筒の表を見ると、

世田谷区緑ヶ丘町三〇七番地

三芳新造様

と、これも筆蹟をくりますためだろう、定規でひいた
ような正確さで、一劃一劃書いてある。差出人の名前は
むろんなかったが、消印を見ると緑ヶ丘郵便局となつ

ているから同じ町にすむ人間のしわざにちがいない。

金田一耕助は雀の巢のようなもじやもじや頭をかきまわしながら、二度三度、この奇怪な密告状を読みかえしたが、やがてごくりと生唾なまつばをのみこむと、眼をあけて、眼のまえにいる三芳夫妻を見くらべた。

ピアノストの三芳欣造氏は、純白の襟と袖口に、細い黒のラインの入ったセーターを着て、ゆったりと椅子に身をもたせ、マドロス・パイプをくわえている。夫人の恭子はハンケチをいじりながら、悪戯いたづらっぽそうな眼をして金田一耕助のようすを見ている。

金田一耕助はこいつ臭いぞというような顔色で、
「三芳さん、これ、ど、どういんです。悪戯いたづらにしても……いや、悪戯いたづらにきまっていますか、それにしても……」

と、そこで耕助はわざと底意地の悪そうな笑顔を恭子にむけて、
「こちらの奥さん、こういう同性愛の嗜好がおりな人ですか」

「いやあな、金田一先生」

と、恭子夫人は金田一耕助をにらむような真似をして、

「先生にも似合わないじゃありませんか。もつと注意

ぶかくその手紙をお読みあそばせ」

意味ありげな夫人の言葉に、

「えっ！」

と、金田一耕助はもうちど手紙に眼をおとしたが、かくべつ読みちがえたところがあるとは思えない。主人にたいしてその夫人の歪んだ不貞行為を密告してきた投書としか思えないのである。

「いや、失礼しました。金田一先生」

金田一耕助の不思議そうな顔色をみると、三芳欣造氏はやおら椅子のなかから身を起した。

「その密告状をもういちどよくごらん下さい。その宛名、三芳新造となつて居るでしょう。ところで、ぼくの名は欣造ですね。それに番地もその手紙は三〇七番地となつて居るが、このうちはあなたも御存じのとおり、二〇五番でしょう。ところが番地も似てるし、名前も似てるるところから、よく間違えられるんですよ」

金田一耕助はおもわず眼を見はって息をのんだ。

「そ、それじゃこちらとは別にこの町の三〇七番地に、三芳新造という人物が住んで居るんですか」

「そうなんです。金田一先生」

恭子夫人も身をのりだして、

「そうなんですのよ。金田一先生。むこうさまはなに

をなさるかたかよく存じあげないんですけど、うちの主人、名前が売れてるでしょう。それに古くからここに住んでおりますし、配達される郵便物のかずも多うございますから、よく三〇七番地の三芳さんあてへの手紙が、間違つてこちらへ配達されるんですの」「それに気がつかずに御主人が開封されたというわけなんですね」

「そうです、そうです。それというのが、まえにもこんな手紙をもらったことがあるんですがね」

と、三芳欣造氏を取り出したのは、いま金田一耕助のまえにある封筒と、すっかり同じ紙質の封筒で、

世田谷区緑ヶ丘町二〇五番地

三芳欣造様

と、書いた宛名の文字も、これまた定規でひいたような正確さで、一劃一劃書いてある。郵便局の消印も、緑ヶ丘局になっている。

「なかを拝見してもよろしいんですか」

「ええ、どうぞ」

なかの便箋もまえとおなじ紙質で、これまた新聞か雑誌を切りぬいたとおぼしい印刷文字で、つぎのよ

な文章がつづつてあつた。

拝啓

あなたの奥さんは別れたまえの御主人の佐伯達人氏と、いまもってちよくちよく密会していません。そんなことをしてよろしいのでしょうか。ちよつと御注意申上げます。

黄金の矢

三芳欣造様

金田一耕助は茫然たる眼差しで、三芳夫妻を見くらべる。三芳欣造氏は悠然たる面持ちで、マドロス・パイプを吹かしているが、さすがに恭子夫人は耳たぶを紅く染めていた。

「それじゃ、この黄金の矢という人物は、あちこちへこういう中傷的密告状を出しているわけですね」

「そのようです。わたしと恭子と佐伯君のことは新聞に大きく書かれましたからね。恭子が佐伯君とわかれてわたしのところへ走つたということ。……だから、こんな手紙がきたところで、いまさらどうのこう

のということはないわけです。げんに佐伯君がここへあそびにきたとき、この手紙のことを話して、世の中にはおせっかいなやつもあればあるもんだと、笑い話にしたくらいですから、べつに気にもとめていないんですが……」

「でもねえ先生」

と、恭子が途中から話をひきとって、

「先生は……佐伯いえ、あのひとの気性もあたしの気性も、それから主人の性格もよく御存じですから、こういうことも平気で申上げられるんですけど、そうでないかたがこんなことをお聞きになると、どうお思いになるかと思つて……」

と、女だけに恭子はさすがにくやしそうです。

恭子はもと、いまは亡き三芳欣造氏の先夫人にして、おなじくピアノリストだった三芳兼子の愛弟子だったが、数年前、三芳夫妻の媒酌で、音楽家の佐伯達人と結婚した。

この結婚はたいへん成功のようにみえて、そのじつ不成功だった。わかifulたりの芸術家は、たがいの個性が強過ぎた。先生の三芳夫妻のように、相手の個性を尊重して譲歩しあうことをしらなかった。

それに佐伯達人の生活が、あまりだらしなすぎた

し、また女出入も多かった。潔癖な家庭にそだった恭子には、それががまん出来なかった。

そこでふたりは話しあいのうえ、別居生活をはじめたが、そのうちに、兼子夫人がとつぜん交通事故で死亡した。

こうして主婦をうしなつた三芳家の家庭へ、恭子がなにかと手伝いに入入りをしていうちに、欣造氏と恋におちたのである。そこで欣造氏と佐伯達人、恭子と三人話しあいのすえ、恭子は佐伯とわかれ、欣造氏のもとへ走つたのだが、このことは、当時デカデカと新聞に書きたてられたので、世間で周知の事実だった。

金田一耕助はそれより少しまえ、欣造氏の友人にあたる芸術家を、欣造氏の依頼によつて、ある事件の渦中より救つたことがあり、それ以来、昵懇じこんのあいだがらになつていた。したがつて、佐伯達人とのいきさつも、よくのみこんでいるのである。

「恭子はこういう気性だから、こんな下らん中傷なんか、べつに気にもとめんだらうと思つたんだが、やはり女だね。悔しがつてねえ」

「だつて、あんまりしつこいんですもの……」

「しつこいって……？　すると、たびたびこんな手紙がくるんですか」

「そうなんですよ、金田一先生」

と、欣造氏は吐きすてるように、

「破りすてても、あとからあとから寄越すんだ。これでもか、これでもかと云わぬばかりにね。そこでこっちもうるさくもあるし、いくら薄気味悪くなったもんだから、警察へとどけて出たんだ。そしたら、驚きましたな」

「驚いたとは……？」

「いや、被害者はぼくんちばかりじゃないんですな。ほかにもずいぶんあるらしい。警察へとどけて出たぶんだけでも五、六件あるそうだから、外聞をはばかって、泣寝入りをしてる被害者が、相当あるんじゃないかって、署長もいつてましたがね」

「うちなんか、世間さま御承知のことですし、それに主人に理解がございませうからよろしいんですけれど、これがもつて、家庭争議が起つておうちもあるんじゃないかって、そんな気もするんですよ」

恭子夫人は真顔だった。

「それで、金品を要求してくるようなことはないですか」

金田一耕助の質問にたいして、欣造氏は恭子夫人をふりかえった。

「恭子、あの手紙を金田一先生にお目につけなさい」

「はい。あたし、あまりくやしいもんですから、みんな破つてすてようと思つたんですけれど、主人が一通は後日の証拠にとつておけというものですから」

恭子夫人が紙ばさみのあいだから取り出したのは、他の二通の密告状と同様、ありふれた封筒の表に、

世田谷区緑ヶ丘二〇五番地

三芳恭子様

と、これまた定規でひいたように正確に、一劃一劃書いてあり、例によつて差出人の名前はなく、消印は緑ヶ丘郵便局となっている。

「なかを拝見してもよろしいでしょうね」

「はあ、どうぞ」

なかみはあいかわらず、ありふれた便箋のうえに、切り抜いた印刷文字の貼りあわせで、つぎのような文章がつづつてあつた。

拝啓

最後にもう一度要求いたします。この手紙を見

しだい現金で一万円、緑ヶ丘神社の拝殿の背後にある、大櫓の根元に埋めておきなさい。金は一週間のうちにとりにいきます。もし、この要求をいれなければ、あなたと佐伯達人氏の関係を御主人に密告いたします。

三芳恭子様

黄金の矢

「なるほど、こういう手紙がたびたび来たんですね」
「ええ、これが三回目でしたわね。最初のも第二回目のも、主人に見せたんですが、主人も問題にしないものですから、そのまま破ってしまっただけです。するとまたこの手紙がきたでしょう。ここに最後に……と、いう文字がございますので、主人もなにかの証拠にとっておこう。そして、しばらく様子を見ていようと云っておりますうちに、主人宛にそのような手紙がくるようになったわけなんですの」
「こういう手紙は何回来たんですか」
「やっぱり三回でした。最初のと第二回目のは破ってすてたんですが、あまりしつこいものだから、これだけはとっておいて、警察へとどけたというわけです」

「しかし、妙ですね。金をゆすりそくなって、御主人に秘密をばらすのが目的なら、一回きりでよさそうなものですがね。あまりたびたび手紙を投函するということは、当人にとってかなり危険なわけですからね」
と、いつてから金田一耕助は思いついたように、
「いや、それとも一回きりじゃ奥さんが、かくしてしまうかもしれないと思つたのかもしれないね」
「ところがねえ、金田一さん」

と、欣造氏は体を乗りだして、

「署長や捜査主任の話によると、この手紙の主の目的が果して金品強請にあるかどうかからんというんですね」

「と、いうのは……?」

金田一耕助もちよつと眼をまるくする。

「それはこうです。ちよつどわたしと同じようなケースがまえにふたつあつたそうです。それがどこのどなただか、そこまではむろん警察でも申しませんでした。が、やはり奥さん宛てに脅迫状をよこしたんですね。ところが、黄金の矢の指摘している奥さんの秘密なるものが、夫婦間では秘密でもなんでもなくなつていた。そこで奥さんが御主人にその手紙を見せ、御主人が警察へとどけて出たんですね。そこで警察で試み

に、要求しただけの金額を、要求した場所へかくしておいて、ひそかに見張りをつづけていたんですが、三度とも一週間たつても、十日たつても取りに来ず、しかも、脅迫状はあいかわらずやってくるんだそうです」

「なるほど、それは妙ですね」

「だから警察側の意見では、これはある種のマニヤではないか。ひとを中傷し、他人の家庭の平和を破壊することに、一種異様なよろこびをおぼえるという、精神異常者のしわざじゃないかというんですがね」

「金田一先生」

と、恭子夫人は息をのんで、

「もしそうだとすると、あたしいっそう気味が悪うございますわ。そんなひとが同じこの町に住んでるかと思つと……」

恭子夫人がおびえたように肩をすくめるのも無理はない。

金品の要求だけならば、……それとても非常に悪質な犯罪だが、しかし、それならば世間に類のない事件とはいえぬ。ところが、もしこれが世間ありきたりの脅迫事件とみせかけておいて、そのじつ、毒矢のごとく他の古疵ふるきずをあばき、他人の家庭の平和を破壊するの

が目的だとしたら、それこそ世にも異常な歪んだ悪質犯罪といわねばならぬ。

金田一耕助はなにかしら、この郊外の落ちついた住宅街のうえに、まっくらなかげろうが立ちのぼっているような感じにうたれずにはいられなかった。

一一

三芳家の応接室にはガス・ストーヴがほのかな音を立てている。

応接室の窓の外には、青い芝生があなたかそうな早春の陽を吸って、芝生をとりまく花壇には、咲きみだれた八重水仙が、黄色いマスをつくっており、チューリップやヒヤシンスが、小指ほどの芽を出しかけている。応接室からななめに見える日本座敷の縁側には、みごとにペルシャ猫がぬくぬくと香箱をつくっている。

すべてが平和な郊外の、ゆたかであたたかそうな住宅のたたずまいなのだが、それにもかかわらず金田一耕助は、なにかしら首筋をなでる冷たいものをかんじずにはいられなかった。

耕助はしばらくそそけだったような顔をして、この

まがまがしい三通の手紙を見ていたが、やがて咽喉のおくで痰をきるような音をたてると、

「ところで、間違ってお宅へ配達されたこの手紙ですが……」

と金田一耕助の言葉を聞くと、欣造氏は顔をしかめて、

「じつはわたしも弱ってるんです。いつもこちらへ間違つて配達されると、すぐ女中をやつて三〇七番地の三芳氏のところへとどけてあげてあげてますが、こんどの場合、ついうっかり開封してしまつた。開封してなかを読んでから間違いだと気がついたが、内容が内容だから、とどけていいもんかどうか迷つてしまつて、それであなたにきていただいたというわけです」

金田一耕助はもういちど、同性愛うんぬんの、まがまがしい文字を読むと、不快そうに顔をしかめて、

「いったい、この三芳新造さんというのはどういうひとですか」

「さあ、どういうひとつて、恭子、おまえなにかしてゐる？」

「いいえ、あたしも詳しいことは……。いちどお手紙のことでこちらへお札にいらしたことがございますので、お目にかかつたことはございますが……」

「いくつぐらいの人物ですか」

「さあ」

と、恭子夫人は首をかしげて、

「五十前後ではないでしょうか。小鬢こびんにちらほら白いものが見える、物静かな、お上品なお人柄とお見受けいたしました。ちよつと学者といった感じの……」

「奥さんというのは御存じありませんか」

「はい、ちよくちよく、的場さんのところでお目にかかります」

同性愛うんぬんのことを思い出したのか、恭子夫人はちよつと頬をそめた。

金田一耕助は膝を乗りだして、

「的場さんとおっしゃるのは、この手紙にあるアメリカがえりの的場奈津子夫人のことですか」

「ええ。そう」

「それじゃ、奥さんは的場夫人と御懇意なんですわね」

「はあ、的場さんのお嬢さん……御養女とかうけたまわつておりますが、そのかたがうちへお稽古にいらつしやるもんですから……」

「恭子のお弟子なんですよ」

と、そばから欣造氏がことばをそえた。

「はあ、それにうちの和子さんが、星子さん……的場

さんのお嬢さんですね、そのかたの同情者で、よくあそびにあがるもんですから」

和子というのは欣造氏と先妻、兼子夫人のあいだにうまれた長女である。

「同情者というと？」

「ああ、それはこうなんです」

と、欣造氏がひきとって、

「その星子さん……われわれはみんなボンちゃんと呼んでるんですがね、そのボンちゃんというのが気の毒な娘で、ことし十七になるんですが、小児マヒかなんかで両脚が不自由なんです。それで学校へもいかず、ピアノを習わせているんですが、それをうちの和子が不懨ふげんがるわけです」

「お子さんをおあずかりしてるとはいうものの、それほど御懇意な仲というでもないのですから、あまりさいさいいっちゃいけないって、和子さんに注意するんですけれど、なにしろボンちゃんが慕うものですから、つい和子さんもお可哀そうになつて出向くんですのね。するとの場さんの奥さまがたいそう歓待してくださるらしいんであたしも捨ててはおけず、二三度お札にあがつたことがあるというわけです」

「そこで、三芳新造さんの奥さんに、お会いになつた

わけですね」

「はあ、それというのが三芳さんのお宅というのが、ちよつどの場さんのお屋敷のお隣なんですの。ですからよくいききをなさるらしいんですね」

「それで、的場さんの御主人というのは、なにをなさるかたですか」

「あら！」

と、恭子夫人は良人おとこと顔を見合せて、

「まあ、失礼いたしました。奥さま、奥さまと申上げましたけれど、そのかたおひとりでいらつしやいますの。御主人はアメリカでお亡くなりなすつたとか……」

「それがね、金田一さん、相当財産をもつてるらしいんですよ。一昨年、アメリカからかえつてくると、豪勢な屋敷をかいこんで、養女のボンちゃんとおふたりで住んでるわけです。むろん、奉公人は二三人いますけどね」

「なるほど、すると独身の富裕な寡婦かぶが、隣家の奥さんと同性愛の遊戯にふけつてるわけですか。あつはつは」

「いやな金田一先生」

「いや、冗談はさておいて、的場さんの奥さんという

のは、いくつぐらいのかたですか」

「さあ、もう四十におなりになるんじゃないでしょう
か。でも、パツと派手な御器量のかたですから、三十
そこそこにしかみえませんけれど……」

「三芳さんの奥さんというのは……」

「あのかた、きつとまだ三十まえてでしょうね。とつて
もきれいなかた……」

金田一耕助はちよつと眼をかがやかせて、

「すると、御主人とずいぶん年齢の違う御夫婦です
ね」

といつてから金田一耕助は、しまったとばかりにも
じやもじや頭に手をやった。

三芳欣造氏はもう五十の坂を越えているのに、恭子
夫人はたしかまだ三十まえのはずである。

「あつはつは」

と、欣造氏はあかくなつてゐる恭子のほうを、悪戯
つばい眼で見やりながら、

「そんなところで似てるもんだから、郵便配達夫が
間違えるのかもしれないね」

「いや、どうも失礼いたしました」

と、耕助はペコリと頭をさげると、

「それで、どうでしょう。奥さんがごらんになつたと

ころ、そのふたりの奥さんとのあいだに、同性愛関係
があるとお思ひですか」

「そんなことが……」

と恭子はうち消すと、

「それはうちの和子さんの話によると、とても仲よく
していらつしやるそうですけれど、そんなけがらわし
いことが……的場さんの奥さんにしてみれば、二十年
ぶりに日本へかえつてこられて、御主人はなし、こち
らにこれという身寄りはおありにならないつて話です
し、三芳さんも昨年、こちらへ引越してこられたばか
りで、おたがいに親しいかたがないわけですから……」

「的場さんの奥さんて、二十年ぶりにアメリカから、
かえつて来られたんですか」

「はあ、なんでもそんなお話でした」

「御主人はアメリカでなにをしていられた人でしょ
う」

「さあ、そこまでは存じません」

「ねえ、金田一さん」

と、欣造氏はマドロス・パイプにきざみをつめかえ
ながら、

「こういう郊外の住宅地には、いろんな人物がいるわ

けです。それも十年、二十年と住みついてれば、だんだんどういふ人物かわかってくるんですけれど、なしろ敗戦を契機として、いいひとがどんどん没落していつて、家屋敷を売りはらつていつたでしょう。だから、そのあとへやつてきたひとたち、どういふ経歴の持主なのか、わからないひとがたくさんいるわけですね。的場夫人なんかそのひとりで、隣はなにをするひとぞというわけですね」

そして、そういう素性のわからぬ人物のなかに、黄金の矢がかくれているわけである。金田一耕助はまた、どすぐろいかげろうのようなものをかんじずにはいられなかつた。

「それじゃ、もう少し的場夫人と三芳新造さんの御家族のことを聞かせてください。的場家には奥さんとボンちゃんというお嬢さんのほかに、どういふひとがいるんですか」

「はあ、お種さんという女中のほかに、別棟に爺いさん夫婦が住んでるようです。それから星子さんの家庭教師兼、看護婦のような恰好で、三津木節子さんというきれいな、わかい御婦人がいらつしゃいます」

「その節子さんという婦人に、佐伯君が惚れてるらしいんですよ」

欣造氏のことばを聞いて、金田一耕助はギョツとしたように眼を見張つた。

「それじゃ、佐伯さんも的場家と昵懇じつこんにしてるんですか」

「はあ、あの、いつかうちの和子さんと佐伯さんが散歩してゐる途中で、的場さんの奥さまにお目にかかつたんです。それで和子さんが紹介してあげたら、ぜひうちへお寄りなさいというわけで……的場さんの奥さまってかた、とてもお愛想のいい、お客ずきのかたですから」

「そこで佐伯さんは三津木節子さんてひとに会つたんですね」

「そうです、そうです。こつちへ来てもうちへ寄らずに、的場家だけ訪問してかえることがよくあるようです。和子さんがあそびにいつてばれるんですがね」

「それというのが的場さんの奥さまってかたが、弓のお稽古をしていらつしゃるんです。佐伯さんはそれに興味をお持ちになつて……」

「弓……」

と、金田一耕助はまた眼を見張つて、

「弓つて、西洋ふうの弓ですか」

「いえ、ところが純日本風の弓なんです。とても健

康にいいからとおっしゃって……それで佐伯さんもちよくちよく弓をひきにいらっしやるんですわね」

「弓の稽古はつきたりさ。ありや三津木さんに会いにくるんだよ」

「ほっほっほ。それだってよろしいじゃございませぬか。節子さんって、あんなにお綺麗で、おとなしやかなかたですもの。あのかたならきつと佐伯さんとうまくいくと思うわ。そうそう、うちの和子さんが、節子さんてかたの大的崇拜者なんですのよ」

「なるほど、なるほど」

と、金田一耕助は気になるように、同性愛うんぬんの密告状に眼をやりながら、

「それでの場夫人にはこれという身寄りのひともないというお話でしたが、誰がその家を世話したんですか」

「ああ、そうそう、それは小田急沿線の成城ってところに、八木信介さんてキリスト教の牧師さんがいらっしやるんです。そのかたながらくアメリカにいらして、その時分、的場さんの奥さまと懇意にしていらしたそうで、奥さまがこちらへかえってこられたのも、そのかたを頼ってこられたんですね。それで、そのお屋敷の三津木節子さんも、みんな八木さんのお世話だ

とかうけたまわっております。あたしもいちどの場さんのお宅で、八木さんというかたにお目にかかったことがございますが、的場さんの奥さま、とてもそのかたを頼りにしていらっしやるようです」

「そのほかに的場家へ出入りをするひとは……御用聞きやなんかはべつとして」

「はあ、ほかには緑ヶ丘病院のわかい先生で、沢村さんてかたが一週間に二回、星子さんを診察にいらっしやるんです」

「ところがね、金田一先生」

と、欣造氏はにやにやしなから、

「その沢村ってわかい医者が診察にくる日にかぎって、うちの和子がボンちゃんを見舞いにくんだ。ソワソワとね。あっはっは」

「まあ、あなた、そんなこと」

恭子夫人はほんのり頬を染めながら、かるく良人をつたしなめる。欣造氏はのんきそうにわらいながら、

「いいじゃないか。なかなかいい青年だ」

と、楽しそうにふんぞりかえって、たばこの煙をふかしていたが、急に体を起すとまじめな顔になり、

「つまりね、金田一先生、いま的場家では二組のロマンスが発展しつつあるんだが、それだけにこの黄金の